

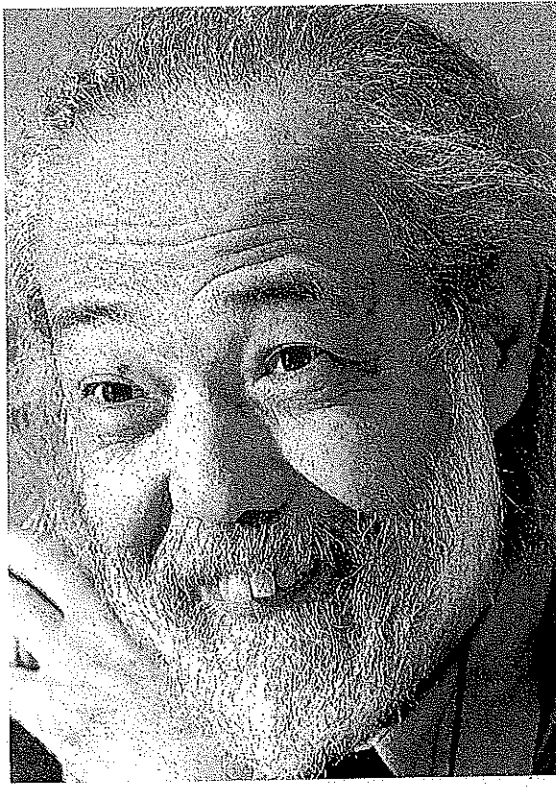
# ネアンデルタール人滅亡 赤澤威さんに聞く

「頭が大きく力持ちのネアンデルタール人がおよそ四万年前、地球上からこっせんと姿を消した」

高知県土佐山田町の田圃地帯にある高知工科大学。一九六七年以来、ネアンデルタール人の調査研究を続ける赤澤威さんは、今、この大学の総合研究所に教授として勤務している。

ガラス越しに研究室がのぞけるモダンな建物の廊下を進む。赤澤さんの研究室はずむに分かった。机上に置いた頭骨の模型が二つ、目に飛び込んできたからだ。身長一八六センチ、体重七六キロのスマートな体に、白いひげをたくわえた人類学者は、ゆっくりかみ砕くように話し始めた。

「ドイツのネアンデルの谷にある石灰岩の洞窟から旧人であるネアンデルタール人の骨が発見されたのが一八五六。以来、彼らをめぐる様々な議論が起きました」  
この夏もシリアにあるテマリエ洞窟の発掘に出かけた。「ネアンデルタール人は二十万年前にヨーロッパに出現。われわれホモ・サビエンスの祖先にあたるプロトクロマニヨンがそこに姿を見せたのが



あかざわ・たける 人類学者。1938年大阪生まれ。慶応大学文学部卒、東京大学大学院人類学専門課程中退。東大教授、国際日本文化研究センター教授などを経て現在、高知工科大学教授。67年以来、シリア、レバノンで旧石器時代の遺跡調査に携わる。著書に『ネアンデルタール・ミッション』(岩波書店)など。

## 脳に隠される真相

# がけっ縁に立つ現代人

十萬年前、洞窟周辺でも双方が共存していたと考えられていたネアンデルタール人とプロトクロマニヨンが物々交換をした証拠は残っていない。だが、戦ったことを示すものは何も残っていません」  
「四万年前、ネアンデルタールが姿を消し、プロトクロマニヨンが残る交代劇がおきます。なぜ、交代劇が起きたのか。その謎を探るために、私たちはテマリエ洞窟を発掘しているのです」  
赤澤さんらは、すでにネアンデルタールの二歳になる幼

児の骨を、保存の良い状態で発見している。今、狙うのは成人のネアンデルタールを正確に再現できる骨の発見だ。成人には絶滅の原因を示す痕跡があるはずだからだ。

「現代人は、がけっ縁に立っている」  
「ヒトの進化は交代劇の繰り返しでした。六百万年前、アフリカの地でチンパンジー

の祖先と分岐して、二足歩行を始めた猿人。二百五十万年前、最初の石器製作者として登場したホモ・ハビリス。百七十万年前に出現し、最初のアウト・オブ・アフリカ、つまりアフリカからの脱出をはかったホモ・エレクトス」  
「ヨーロッパに二十万年前に現れて、死者の埋葬もしたネアンデルタールは、四万年前には地球の覇者の座を、私たちの直系の祖先ホモ・サビ

エンスに明け渡します」  
ホモ・サビエンスはアフリカで誕生し、二度目のアウト・オブ・アフリカを経て、ユーラシアの各地に渡り、その中のプロトクロマニヨンがネアンデルタールと競い合ったものとみられる。

「現代人が滅亡を避けるためのヒントは、最新の交代劇で退場したネアンデルタールが悩みを克服できなかった原因の中に隠されているはずだ。恐らく悩みを克服するための言語能力に弱点があったのではないだろうか」  
言語「コミュニケーション能力を示す遺伝子は、自然淘汰によって変化する。急速に進むゲノムの解読で、その違いを究明できるのだろうか。

る新人類が現れている可能性もあります」  
赤澤さんは、現代人に、滅亡したネアンデルタールの姿を重ねる。  
「交代劇の間隔が短くなる進化の法則に、拍車をかけるのがその行動です。今の勢いで経済が成長して、資源を消費し、環境を破壊して行けば、自らの存在を脅かすことになる。対策はとられていないけれど、地球環境の改善の兆しはいつどこに見られませんか」

「真相は脳に隠されてる」  
過去の交代劇で去って行った人類は、三つの悩みを克服できなかったからではないか、とみる。「食べ物を確保する」「子孫を残す」「外敵から身を守る」——といった悩んだ。

「どのような時代に、何が引き金になって言語能力に差がついたのか。ゲノムの世界だから、真相に迫るのは、無理がありません。それより、脳の歩みを研究した方が真相に迫れます」  
家族のために食べ物を確保する。狩りや方法を仲間と相談する。獲物を分配し家族のだんらんを楽しむ。子育てをする。子孫繁栄のための婚姻ネットワークをつくる。家族や仲間を外敵から守る。悩みを克服するためのそんな行動が、言語能力の発達を促し、脳に変化をもたらしたのではないか、というのである。  
「現代人の脳の大脳皮質には、言語行動にかかわる二つの領域があります。言葉を話すという問題を処理する部分と、言葉を理解するという問題を処理する部分です」  
西アジア死海地溝帯におけるネアンデルタールと現生人類交代劇の総合的説明——赤澤さん(編集委員 足立則夫)

赤澤さんは目下、そんな研究課題を掲げるプロジェクトチームの代表を務め、今年度から五カ年計画で、謎の解明を目指す。研究協力者の中には、脳の仮想復元の専門家であるスイスの学者ら外国人十四人も名を連ねる。  
「これまで集めた実物資料をX線CTで測定、三次元データをコンピュータ内に取り込んで、仮想空間上に頭骨を復元します。最大の課題は、いかに正確に頭蓋像を作るかです。次にそこに収まっている脳そのものの実体モデルを作り上げるのです」  
ネアンデルタールの脳皮質が一体、どのような形をしていたのか。その働きなどの点で、ホモサビエンスに比べ劣っていたのか。そこから私たち現代人は、地球に生き残るための重要なヒントを手に入れることができるに違いはない。研究の成果が待たれる。